

あたりまえの有難さ

岐阜市立厚見中学校 3年

近藤 万由佳

茶色く濁った湖の中で、きらきら笑顔で楽しそうに遊ぶ子供、湖が、茶色く濁っているのは泥のせいだけではありません。その湖には、百万人以上の生活排水が、直接流れこんでいるのです。

この光景は、私が去年の夏、岐阜市夢プロジェクトの派遣生として8月17日から24日までの8日間、カンボジア研修に行ったときに見たものです。

東南アジア最大のトンレサップ湖には、百万人以上の人が湖の上に家を建てて暮らしています。水上生活者の家には、ガスや水道なんてありません。トイレもありません。用を足すときは、湖の中で行います。家もすぐに傷むので、とても修理費がかさみます。生活は、苦しそうでした。でも、そこで暮らす子供達は、まるで太陽のように明るく、元気いっぱいに笑っていました。

カンボジアには、他にも靴を履かずに学校に行く子供や、地雷原の近くで生活する人がいました。みんな不満なく、楽しそうに生活していました。

私はこの8日間の間、1日の振り返りをするたびに心が痛んでいました。

家や外食先での料理を「まずい」「嫌い」と言って残す人。

次々と新しい物を買っては、「あきた」「新作がでたから」と言って捨てていく人。

大勢の人が。とてつもない豊かさの中で生活しているはずなのに、不満をこぼし満たされていないのです。私は、日本に暮らす多くの人々が「幸せ」と感じられていない事に心が痛んだのです。快適に過ごせる環境が整っていること。電気も、ガスも、水道も、安全に自由に使えること。安心して暮らせる家があること。そして何より、家族がいること。それをあたりまえと思ってしまうと、幸せなんて感じられなくなる。その有難さを、見失ってしまう。

私は里子です。

小学校高学年の頃から家族と離れ、里親さんのところで生活しています。里母さんにはたくさんの事をして頂いて、とても感謝しています。だけど、家に帰りたくなって思うときがあります。お父さんとお兄ちゃんとの和やかな食事の時間を思い出すこともあります。お父さんが仕事で家になくて、子供だけでご飯を食べた日も何日もあったけど、やっぱり戻りたいなって思うときもあります。

当時は、「何で私が家事をやらなければいけないのか」と感じていたし、贅沢な生活をしていた訳でもない。でも振り返ってから初めて「幸せだったんだ」と気づきました。

幸せって、人それぞれ違うから気づくのが難しいかもしれません。日常の中で、ご飯を食べられること、衣服を着て靴をはけること、家族と一緒に過ごせる事。どんな小さな事でも、決してあたりまえではないのです。有る事が難しい、有難いあたりまえを探してみるといいです。見つけていくうちに、小さな幸せが心に積もっていきますよ。

私のまわりには、有難いあたりまえがあふれ返っているのです、今とっても幸せです。